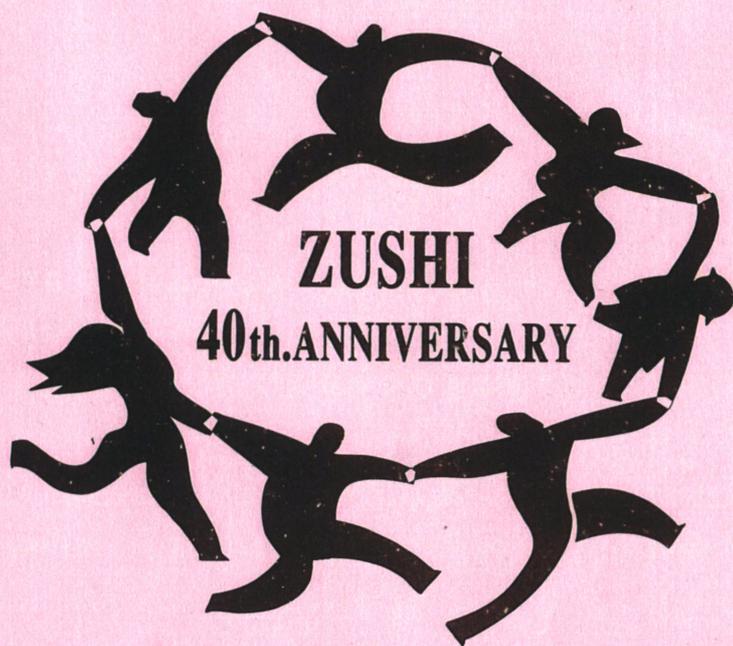


逗子再発見

ほ と と ぎ す

不如歸



市制40周年記念事業実行委員会
継続事業部会報告書

目次

はじめに	P 1
◇ 小説「不如帰」と蘆花	P 2
ほととぎす	P 3
浪子とナミコ貝	P 4
◇ 物語	P 5
浪子不動	P 7
舞台としての逗子	P 8
◇ 石碑建設	P 8
◇ 石の伝説	P 10
時代背景	P 11
加工と運搬	P 11
◇ 石碑実測調査	P 13
◇ 海底沈石調査	P 16

はじめに

はじめて逗子海岸を訪れた人は、緑の山に囲まれた波静かな逗子湾の美しさに感動するでしょう。

そして観察力のある方は、逗子湾の西隅の海中に建つ石碑に興味を引かれる事と思います。

さて、我がまち逗子市は、平成6年4月15日に市制40周年を迎えました。これを記念して市民の手作りによるいろいろな記念事業が6年度内に開催されました。この事業もその一環のもので「逗子再発見」というタイトルのもと、逗子にすでにあり、色あせてしまいそうな貴重な財産にもう一度光をあてよう、という趣旨でこの継続事業部会という部会が設置されました。その後部会委員といくどかの話し合いの場を設け、最終的に市民のシンボリック的存在である「不如帰」の石碑に光をあてる事になりました。まず資料を集め石碑の実測調査を実施し、専門家の意見や多方面の方々のご協力を賜り、やっとこのような報告書として取りまとめる事ができました。

振り返れば、1933年町制20周年の記念事業として町民の寄付により、この石碑が建てられて以来、節目の年には不如帰に関わるいろいろな事業が行われてきており、市制40周年記念事業としては、意義のある事業という確信を得る事ができました。ここで私たちは、ただ昔を懐かしむのではなく、過去の財産を未来に向かって蘇らせ、いかに後世に伝えていくかを考える必要があります。過去の資料を整理し見つめ直し、本当の意味での節目の製作を試みました。そして武男や浪子が、再び多くの人々の心に感動を与えてくれる事を祈念し、新たな逗子の未来を拓くカギの一つになれば幸いです。

平成7年3月

市制40周年記念事業実行委員会
委員長 田中俊樹

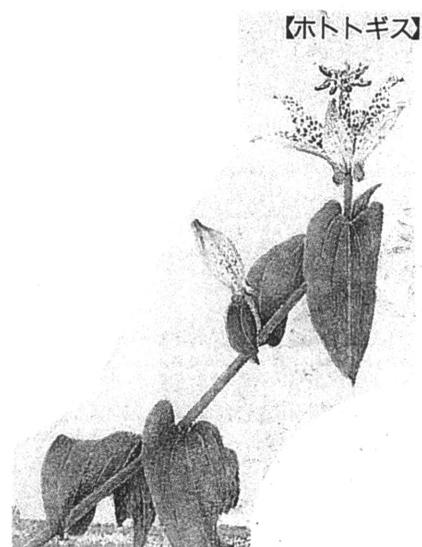
ほととぎす

³⁾ 岩波書店編集部によると、最初新聞にのったとき「ほととぎす」とふりがながついて以来、一般にそれが用いられてきました。作者自身はのちに「ふじよき」と言い、百版の序文ではそうふりがなしていますが、本文庫版では言いならわしに従って「ほととぎす」の方を採用しましたと説明しています。

ほととぎすは、⁴⁾ 辞書を引くと、不如帰の他に杜鵑・霍公鳥・時鳥・子規・杜宇・沓手鳥・蜀魂とも書きます。また、⁵⁾ ほととぎすは鳴声が人の叫び声のように感じられ、人恋しさを誘う鳥で、古来より文学、特に和歌にうたわれてきました。呼び方もあやなしどり・くつてどり（沓手鳥）・うづきどり（卯月鳥）・たまむかえどり（魂迎鳥）・しでのたおさ（死出の田長）などいくつもの名前が載っています。

ほととぎすは、主にうぐいすの巣に卵を生んでひなを育ててもらう託卵で良く知られた鳥です。このあたりには五月中旬から六月にかけてフィリピン方面から渡って来て、十月ごろ帰っていく夏鳥です。比較的身近な鳥で、気を付ければ姿を見る事ができます。「てっぺんかけたか」「ほんぞんたてたか」「ほっちゃんかけたか」「特許許可局」などと様々に聞きなされます。その声を聞くため、平安朝の人々は夜を明かしたといわれる名鳥です。この鳥は口の中が赤く、鳴いた時に赤い色が見えるそうです。それで昔から「鳴いて血を吐くほととぎす」と言われてきたのです。蘆花は肺結核で咯血を繰り返す浪子を、ほととぎすになぞらえてこの題名をつけたのでしょうか。

逗子市の市花もほととぎすです。花の模様がほととぎすの腹の班紋に似ているため名付けられた花です。秋になると市内の随所にひっそりと気高く可憐に咲き、市民にとっても親しまれています。市の花に制定されたのは、昭和59年の市制30周年の事です。蘆花もその花を愛し、花のほととぎすも多少は意識していたのではないかと想像しています。



浪子とナミコ貝

ナミコ貝とはどんな貝なのでしょう。蘆花と妻愛子が逗子海岸を散歩した時に拾った小指の先ほどの美しい白い貝、その姿に心を引かれた二人は女の子が生れたら浪子と名付けようと決めていたそうです。ナミコ貝を求めて、子供の頃ナミコ貝で遊んだという人に教わって、逗子の浜辺を歩き小さなナミコ貝の貝殻を見付けました。そしてそのナミコ貝を持って葉山「しおさい博物館」学芸員の池田等さんを訪ねました。池田さんによるとナミノコガイは満ち潮の波に揺られて砂浜にやってきて、引き潮の波に揺られて海の方へ周期的に移動するそうです。博物館に陳列してあるナミノコガイ（フジノハナガイ科）はたった1個で、それはあさりに似た貝で、大きさは小指と言うより親指の先ぐらい、しかも色は薄茶色に紫がかかったような地味な色合いです。ところが、ナミコ貝だと思って持って行った貝は、フジノハナガイでした。二つの貝は生態がほとんど同じで、どちらも波と戯れ、親しみの持たれる貝だそうです。可憐というイメージと小指の先ほどの大きさから言えば薄い藤色のフジノハナガイがぴったりで、藤の花びらに似た可愛い貝です。徳富蘆花が見たという貝はどちらなのでしょう。また蘆花が散歩した明治の頃は、今よりずっと海が綺麗でナミノコガイがたくさんいたそうですが、海が汚れてきた頃から姿を消してしまい、今は逗子の海辺を探してもなかなか見つける事ができません。フジノハナガイは、その後増える傾向にあったようですが、それも現在はやっと見付ける程に減ってしまっています。ナミコ貝は浪子と同じようにはかなく消えてしまうのでしょうか。



ナミコ貝



物 語

6)

物語は、伊香保の自然を心から楽しんだ武男と浪子の幸せな新婚生活から始まり、東京での裕福で穏やかな生活が描かれます。ところが、浪子は当時不治の病だった肺結核を患い、逗子にある浪子の実家の別荘で療養することになる。そこへ丁度、横須賀の海軍部隊に配属された武男がたびたび見舞いに訪れます。

ある暖かな午前、二人は逗子の浜辺を散歩します。現在の高養寺であるお不動さんまで足を延ばします。その日は、蒼々と晴れた空と紺碧の海原を見ながら、浪子は自分の病気がこのまま直らないのではないかと気弱な事を言います。励ます武男に「癒りますわ、屹度癒りますわ、——あ、あ、人間は何故死ぬのでしょうか！生きたいわ！千年も万年も生きたいわ！死ぬなら二人で！ねえ、二人で！」「浪さんが亡くなれば、僕も生きちゃ居らん！」。ここが物語のクライマックスです。

武男は久し振りに東京の自宅に立ち寄った際、母から浪子を離縁するよう進められ強く抵抗しますが、そこへ帰艦命令の電報が届きます。母には離縁の話を決く口止めし、急遽横須賀に戻る途中逗子を訪ねます。終列車も近くなり、やむなく立ち上がる武男。門前で見送りハンケチをふりながら「あなた、早く帰ってちょうだいな」「すぐ帰る。浪さん、夜気に当たってはいかん。早く家へ入りなさい」。道が曲がって、振り返っても姿が見えなくなったが三回目の「早く帰ってちょうだいな」という声だけが、むせび泣きのように後から追ってきて、武男の耳の中でこだまするのでした。

日清戦争勃発により、武男が戦地に赴く間に、浪子の病気が家族に伝染することで家の滅びる事を恐れた武男の母により、離縁され実家に戻されてしまった浪子は、そのショックでさらに病気が悪化してしまいます。なんとか小康を得て再び逗子の別荘で療養を続けるうち、折悪しく出征中の武男が、戦地で負傷したとの広報が入り、心労は重なります。前途を悲観し、死を覚悟した浪子は、不動から崖下の海へ身投げしようとして、居合わせた婦人に危ういところを助けられます。

病気回復が望めない浪子を、この世の思い出にと父が京都へ遊山に連れて行きますが、その帰り、山科駅で列車を乗換え、出発を待っていると、反対方向へ向かう列車が入ってきました。偶然向側の列車に乗っている武男と顔を合わせた浪子は窓から身をのりだし、持っていた董色すみれいろのハンケチを武男に投げ渡します。受けとったハンケチを振りながら狂ったようになにか叫ん

でいる武男と、窓から身を乗り出す浪子を、走り出した列車が無情にも引き裂いてしまいます。家に帰りついた後、浪子の病状は急激に悪化し、「あ、辛い！ 辛い！ 最早——最早おんなんぞに——生れはしませんよ——。あ、あ！」と言ひ残して浪子は息を引き取ってしまいます。当時、浪子は悲劇のヒロインでした。「死んでもいいから肺結核になりたい」と、明治の乙女に言わせしめたわけですが、平成の乙女は、どううけとめるのでしょうか。愛が主題の小説で、当時の封建的な社会制度の下で苦しむ女性に対する同情心と、因習的なものに対する蘆花の反発心が随所に現れています。また、庶民から見れば雲の上の人——上流家庭のお嬢様に対する憧れのようなものも人気の一因ではないかと思えるのです。今では女性が弱い立場にあった封建的な社会風土もすっかり影をひそめ、結核もストレプトマイシンの発見により治療の道が開け、怖い死病というイメージはなくなりました。ガンや心臓病が怖い病気の代表となった今、明治は遠くなり、「不如婦」も忘れ去られようとしています。



「浪子」小説不如婦のさし絵
黒田清輝画（新潮社）



大山巖元師の長女信子

平成7年2月21日付朝日新聞に掲載された。

武男のモデル 三島弥太郎の名刺入れから肖像写真と手紙が見つかったもので、毛筆の文面は「あまりよくうつりすぎて私のやうにては／御座候へとも何とそ私とも／思召御そはにさしをき下され度／いくへにも願上候」と読める。



浪子不動

物語に出てくる不動は「滝の沢不動尊」で、⁷⁾波^{なみきり}切^し不動、白^{しらたき}滝^{こたき}不動、小^{こたき}滝^{おたき}不動、御^{おたき}滝^い不動などといわれていました。お堂の脇に滝があるのでこのように呼ばれてきたのですが、不動尊は厄除不動で、靈験あらたかにして、参詣すればかならず死を救って一縷^{いちる}の光明を与えてくれる、と信じられていました。滝は現在より水量がずっと多かったそうで、白いしぶきを上げて落ち、海の方から良く見えたそうです。物語が有名になった後、浪子不動と呼ばれるようになりました。

不動は江戸時代は小坪の仏乗院持ちでしたが、⁸⁾鎌倉山崎の泉蔵院（現在は廃寺）持ちとなり、明治の終りに池子の東昌寺持ちになり、平成6年東昌寺の管轄をはなれました。

現在のお堂は、葉山堀内にあった慶増院が廃寺になったので建物を昭和28年にここに移築し、不動堂と合併したもので、高橋是清・犬養毅の援助を受けたことから二人の名を取って高養寺と寺名を改めました。

浪子不動のすぐ目の前に小さな公園があります。正式には浪子不動園地といい逗子市が管理しています。その中に最近建てられた「さくら貝の歌」の石の歌碑と共に「蘆花之故地」と記された立派な板碑があります。板碑は永い年月風雨に晒され大部痛んできていますが、逗子在住の書の大家であった藤原楚水さんが書かれたもので、裏面の蘆花小伝は楚水さんの次女青霞さんの筆によるものです。



海岸から見た石碑
白く落ちる滝と不動堂が見える
(昭和12年撮影)



昭和8年11月 石碑落成式

舞台としての逗子

逗子町の前身田越村は明治の中ばまで全くの農漁村でした。明治22年6月、横須賀線の開通と同時に逗子停車場が開設され、東京から汽車で簡単に来られるようになりました。また、横須賀の軍港が発展するにしたがって海軍の関係者や外国人も多数住居するようになり、以来高級住宅地や別荘地として発展しはじめました。交通の便も良く、気候が温暖で海あり山あり、晴れた日には相模湾のかなたに富士も望め、さらに、農・海産物にも恵まれ、保養地にはぴったりの場所であったのです。

徳富一敬が息子の猪一郎（蘇峰）健次郎（蘆花）の両文豪を伴い来遊したのを始めとして、国木田独歩・夏目漱石・泉鏡花など多くの文人もたびたび訪れるようになり、この地の風光を文学作品で世に紹介するようになってからは、一躍景勝地として全国的に有名になりました。純朴な土地の人達と、都のアカデミックな人達が融合する町として、その後も発展し続け現在に至っています。

石碑建設

9) 10)

昭和2年、蘆花の死に際し、告別式で当時の小林章司町長が記念碑の建設計画を公表しました。町の発展に大きく寄与してくれた徳富蘆花に対する感謝と、永くこの業績を称え記念するために記念碑を浪子不動前の海中に建てるというものです。しかし、当時新宿浜埋立問題がこじれ、その後計画は一向に進まず、埋立問題が一応の決着を見たのは昭和6年6月の和解成立です。その後記念碑建設計画が再燃し、昭和8年の町制20周年を記念して町の事業として、予算4千円を逗子住民と関係者の寄付に仰ぎ、その年の夏に完成しました。11月には除幕式が行われ、その時の写真が郷土資料館にあります。工事は新宿の千葉誠治さんが請負いましたが、新宿浜や小坪の若い衆、それと賛同した多くの町民ががたくさん作業に協力したそうです。石碑の文字は蘆花の兄蘇峰の筆による実に雄渾な大作品です。桜山の郷土資料館に原書が展示されていますが、その大きさと迫力に圧倒されるほどです。また、碑の礎石の下には蘆花が作品を書いた時に用いた筆と硯が収められています。

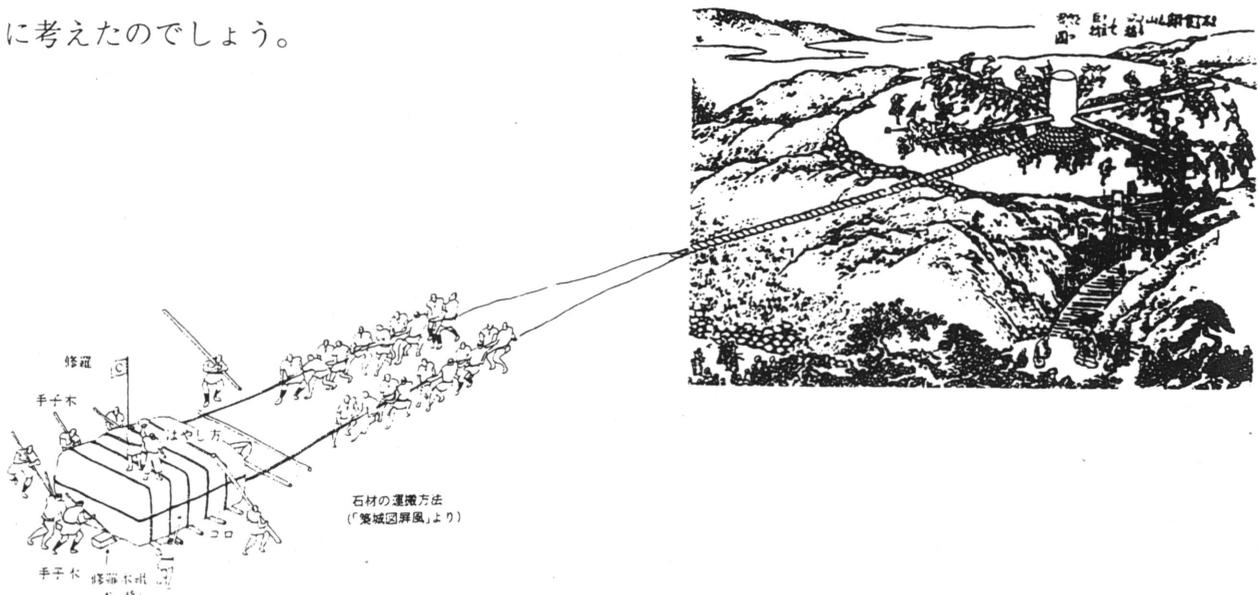
石のあった大崎の先端から建設地までは、海上を直線で約700m。実質の距離は1kmはあるでしょう。潮の引いている間はゴツゴツした岩場で、あそこからどうやって石を運んだので

しょうか。 当時を知る小坪の岡本釣具店の岡本常三郎さんによると、子供の頃の事で記憶は薄れているが、「石にワイヤーロープを縛り付け、下にコロを敷いて、かぐら（神楽棧）で大勢の人が棒を押してロープを引っ張った。ロープを巻き付け終わるとかぐらだけもっと遠くへ移動し、また引っ張るという作業を繰り返した」との事です。修羅やてこ（梃子）も使ったのではないかと思います。4500貫目あるという言い伝えから計算すると約17¹¹⁾もある大石を、二個も人力で運んだのですから、どんなにか大変でたくさんの方が作業に携わったかが想像できます。石碑になった石ですが、小坪寺住職の石井清司さんによると「大崎のはなに鍋島石と呼ばれる大石が二つあって満潮時でも頭を出していました。この付近は波が大きいので、漁師も近寄ることはしませんでした。この石は昭和7年頃（実際は8年）、逗子の浪子不動前に、不如帰の碑として移転し加工されました。この石は江戸の築城か又は修理の時、鍋島藩が担当した工事のため海上を運搬したが、しけに合っ¹¹⁾て避難の途中、坐礁し船は大破し、石だけ置き去りになったものといわれています」と自書「鷺の浦風土記」^{なべしまし}に書いています。前出の岡本さんによると、磯で遊ぶ時は「鍋島さんの上の方まで来たから（潮が満ちできたから）帰ろう」などと、磯での作業や遊びでは皆の目印になっていたそうです。

¹²⁾古くは1812年に書かれた「三浦古尋録」^{みうらこじんろく}にも「鍋島磯 是ハ先年鍋島ノ船石ヲ積来リテ此の処ニテ破船ス故ニ鍋島磯ト申スヨシ」と記されています。また、同書に三浦七石の一つとして「鍋島磯」が数えられています。由緒ある石として認識されていた様子が感じられます。磯は普通、石の多い海岸を指しますが、水中から露出している岩石の意味もあります。

海難事故の直接の記録は残されていないので、どちらにしても言い伝えであり確証はないものの、人々に親しまれて来た「鍋島さん」を信じたいものです。

¹³⁾この石は元和年間から400年程さかのぼる鎌倉時代の貞永元年（1232年）に、わずか26日¹⁴⁾で築いたという小坪飯島の和賀江島の礎石にするために運んできた石ではないかという説もあります。調査により伊豆方面の石を実際に和賀江島の礎石に使った事が、真鶴町の記録にも残っていました。和賀江島と大崎は、小坪湾（鷺の浦）を挟んだ目と鼻の先ですからそのように考えたのでしょう。



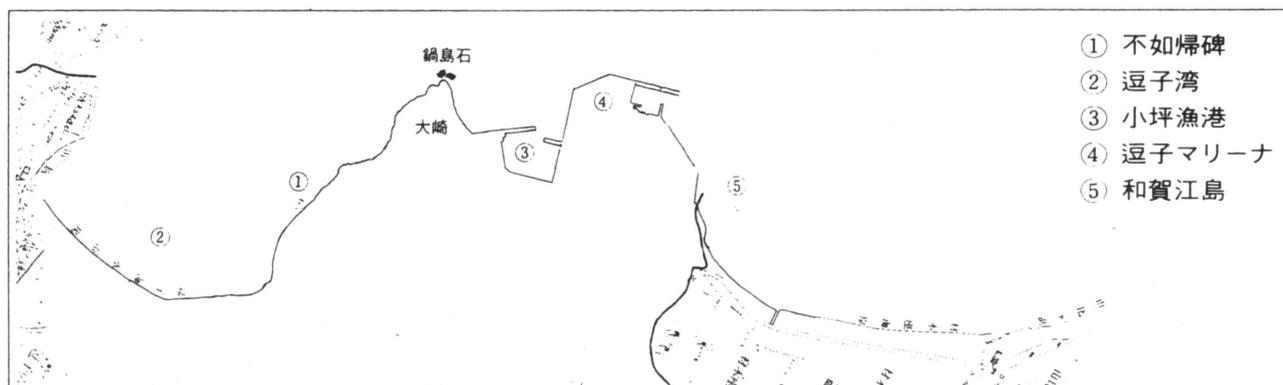
石の伝説

以前から「大崎の先には鍋島石の他にもまだ同じような石がある」といわれていました。逗子湾にも真中付近に大石が一個あって、漁師の網がひっかかって困るので、ずっと沖に移動させたところ小坪の漁師さんに教わりました。それも伊豆石だったかも知れません。

相模湾は、相模灘と言われている通り港の少ない湾です。緊急避難するための港がない、という事は、船にとってとても心細い航海なのです。伊豆半島付近から出港した船は、江ノ島・鎌倉を過ぎやっと相模灘を渡り切って一安心、今度は三浦半島を廻って江戸を目指します。航海図などはもちろん残っていないので推測ですが、航路としては、葉山の名島の岩礁を避けるため、逗子付近では大崎の沖を通過しても良いのではないかと思います。

今回の調査のため桜山の郷土資料館に行ったときです。台風の過ぎ去った2～3日後の秋晴れの日でした。庭からの眺めはいつものながらの素晴らしい逗子湾の景色ですが、大崎の沖の石があるといわれている付近だけに白波が立っていました。重たい石を積んでバランスの悪い船が急に海が荒れてきたとき、波の静かな逗子湾に避難しようとして、普段でも波の荒い大崎の難所で沈没や坐礁をしたのでしょうか。

¹⁵⁾ 慶長11年（1606年）5月25日の大風による沈没事故の記録によれば、鍋島勝茂（佐賀藩）の船120艘、加藤嘉明（伊予松山藩）の船46艘をはじめ、伊豆から江戸へ向かう石船が何百艘も次々に転覆し多数の死者を出したとあります。専門家に元和ごろと鑑定された鍋島石ですが、時代は慶長の次が元和ですから、もしかしたらこの時の大風で坐礁したのかも知れません。¹⁶⁾ 全部で59万個の石を運んだという記録から見ると、いったいどれ程の船が坐礁や沈没し尊い命が奪われたのでしょうか。石の切り出しや運搬がどれだけ危険な作業だったか、この付近から見付かったごく一部の石からも想像できます。



時代背景

徳川家康は、慶長5年（1600年）関ヶ原の合戦で勝利し、慶長8年（1603年）征夷大將軍となり、名実共に天下人となって、幕府を江戸におく事を決めました。その結果江戸は、公儀の場であり全国諸侯の府として、天下普請を諸大名に命令し遂行する条件が整いました。首都としての機能を持つため江戸市街地の整備や江戸城修復拡張工事は、諸大名の將軍に対する軍役の一環として行われ「手伝い普請」と言われていました。幕府にとっては有力な外様大名の財力を消耗させ、幕府への忠誠心を試すという性格もあり、慶長9年（1604年）6月に江戸城修築第1期工事をはじめの命令を出し、実際の工事は慶長11年（1606年）にはじめられました。¹⁸⁾西日本の外様大名を中心に28家に「10万石につき100人持の石1120個づつ」を江戸へ献上するように命じたもので、28家の総石高で計算すると石の数は6万個近くになりました。各大名は船と石の他に人夫や材木等の負担も同時に負ったのです。その費用として幕府は金を支給したそうですが、到底足りるような額ではありませんでした。慶長年間の最盛期には3000艘もの船が1艘に2個づつ石を積んで、伊豆と江戸を月に2度往復しました。

その後も休む暇なく毎年のように工事を行い、外様・譜代の別なく全国の諸大名を使役して江戸城を築かせ、徳川幕府の力は揺るぎなく確立し、寛永14年（1637年）に一応の完成を見るまで行われ、合計で実に59万余個の石を差し出した事になります。

江戸から近く、陸送するよりは、船で海上輸送するほうがはるかに楽であり、堅牢な石が大量に産する理由により、小田原風祭辺りから真鶴半島・伊豆半島を中心に沼津までの各石丁場から伊豆石が切り出され、基礎や石垣などに大量に使われました。その他、小さい栗石は利根川上流域から、また、目立つ部分には自国から高価な御影石などを遠路運び込み、自分の分担した仕事を立派に見せたり、普請の記念にしたり、献上石として差し出し、幕府に対する忠誠心を表わしたりしました。

加工と運搬

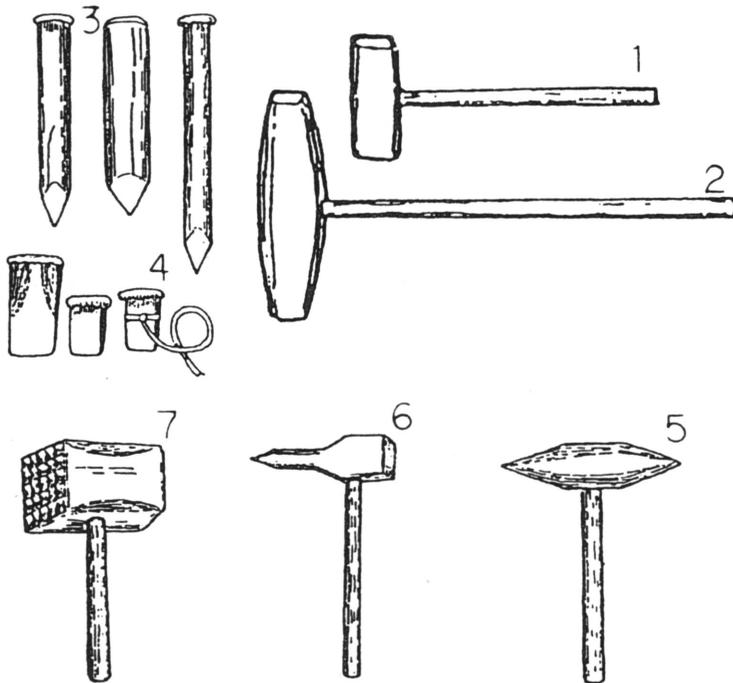
100人持の石というのは、1人分を約30kgとして約3トンの大石です。

²⁰⁾石の切り出しの手順は、まず藩の役人と石工が切り出す石を決めます。その石にノミとゲンノウで矢穴を^{やあな}あ^あけ、そこに矢を差し込み、ヤジメ（ハンマー）で叩いて石を割り、チョウナなどで形を整えます。また、矢穴を孔けるのは根気のいる作業でした。石丁場は足場のいい所ばかりとは限りません、崖の上からモッコ（ゴンドラ）を結び付けたロープを垂らし、モッコに乗っての命懸けの作業もありました。²¹⁾割り方は^{かし}く^けや^ききのような堅い木で作った矢に草を巻き付け、矢穴に打ち込んでから水を掛け、木の膨脹によって穴に沿って割る場合もあります。また、穴にソバ殻を詰め、油を掛けて火をつける、高温で膨脹させることによって石を割る方法もありました。技術の進歩により穴は小さくて済むようになり、穴の大きさや間隔により石の切り出された年代が、おおよそ推定できるのです。また、割った両側には必ず矢穴の半分の跡が残

るので、何百年も経った今でも見る事ができるのです。

運搬の手順は、①切り出した石を港の石置き場まで運び、いかだにのせる。石丁場が山の中の場合は山越えなど難渋を極めました。②いかだで沖の本船に運び積み込む。船から神楽棧で引っ張り、艇で押しながらのせる。③沖は波が高いので岸からあまり離れないよう、また天候に細心の注意を払いソロリソロリと船を進め、天候の変化によっては、港に逃げ込み難を避けながら江戸へ運んでいきました。

この頃の石船は石の底面が船の舷側と同じ高さなので重心が高く不安定なので、転覆しないよう細心の注意を払っていました。石の大きさや形によっては、いかだに載せ空樽を回りに縛り付けたものを船で引っ張ったりもしました。この石は江戸（首都）の城塞を固めるいわば軍需物資ですから、取扱い方次第では幕府から相当な罰を課せられるという覚悟で運んでいたと思います。



1. ゲンノウ……矢穴をあけるノミを打つために使用します。
2. ヤジメ……矢穴に矢を入れた後、これで打ちこみ石割りをします。(重さ約12kg、柄長1m)
3. ノミ……矢穴をあけるサキノミ、ソコノミ、石材加工に使うツバクロノミなどがあります。
4. 矢……石割りの時に使用します。
5. チョウナ……平たい両刃付の仕上げ用の槌
6. コヤスケ……石面の端を直線に削り取ったり、形を整えたりするのに使用します。
7. ビシャン……槌の打面が格子形に刻まれています。石材加工時の平面の荒仕上げに用います。

真鶴の文化財(真鶴町教育委員会)より

石碑実測調査

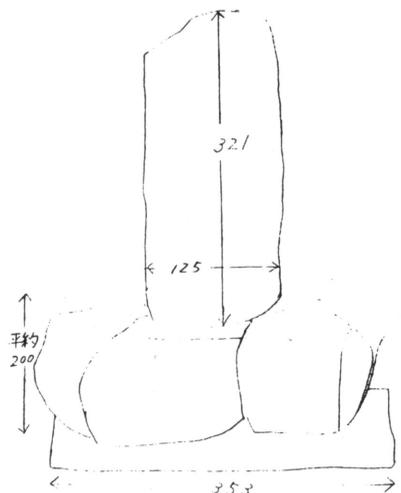
継続事業部会では平成6年5月28日（日）に専門家の協力を得て石碑の実測調査を実施しました。その結果、この石は伊豆石（安山岩・火成岩…火山の溶岩が冷え固まった物）と鑑定されました。碑の台座は六個、本体は一面コンクリートで覆われていますが、上の方にくっきりと矢穴が見えているので、台座と同じ石ということが判明しました。建てられた当時の写真を見ると矢穴は見えません、60年以上経て元の生地が出てきたのでしょうか。台座は外見から推測して一個3～6ト。切り出された時期は矢穴の状態から江戸時代初期の慶長・元和頃（1596～1624年）と見られる。刻印を丹念に探しましたが見付からず、鍋島藩のものという確認は出来ませんでした。刻印は石に刻んだ石工集団の簡単な形の目印などで、直径15～20cm位の大きさで、藩の紋章ではないが、どこの藩のものか大体判別出来ます。

石碑実測調査参加者

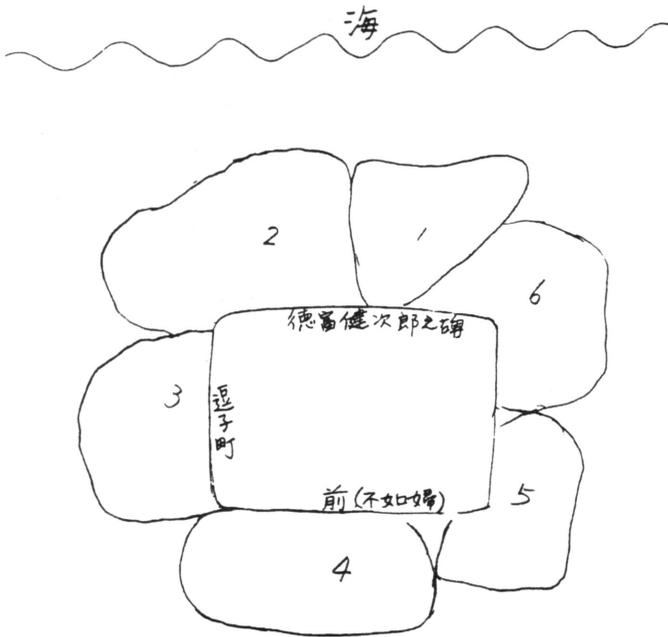
田端 寶作（城郭石垣刻印研究所）	田中 俊樹（実行委員会委員長）
黒田 康子（逗子市教育委員会市史編纂室）	平野 佳一（〃 継続事業部会）
伊藤 一美（逗子市教育委員会教育研究所長）	田中 洋子（〃 総務部会）



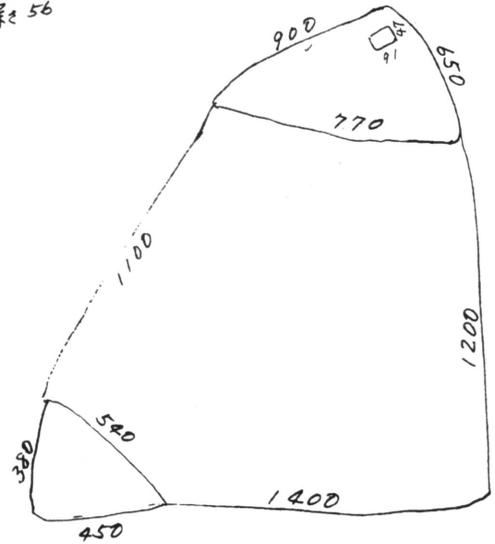
実測調査のようす



No. 1

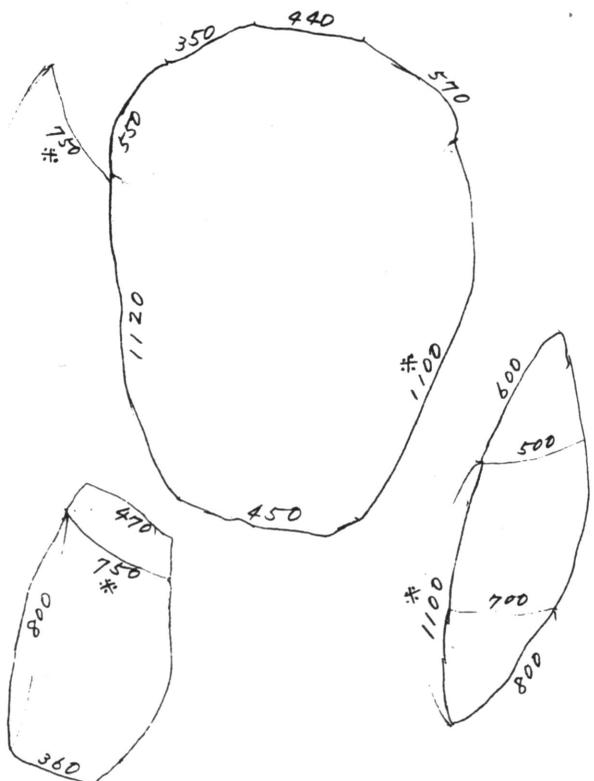
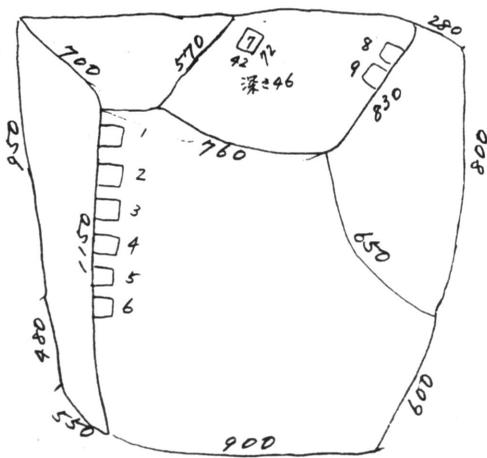


穴
幅 91
長 47
深 56



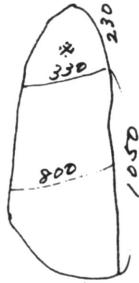
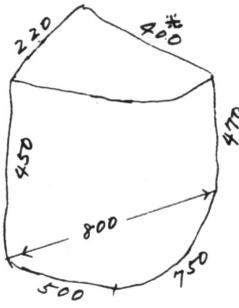
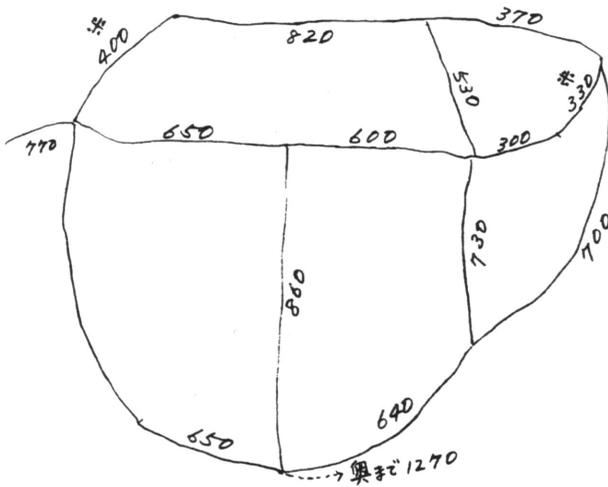
No. 2

No. 3

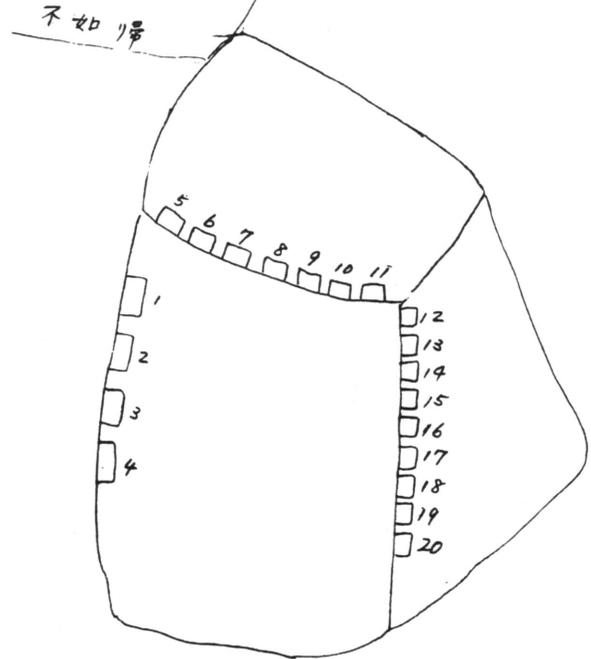


幅 深	幅 深
1 91 90	6 96 87
2 71 92	7
3 70 84	8 103 123
4 91 80	9 89 108
5 90 87	

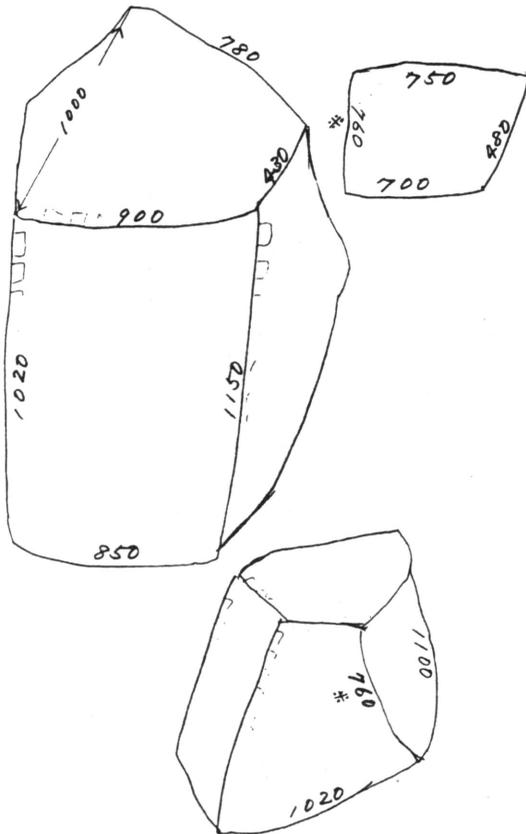
No. 4



No. 5



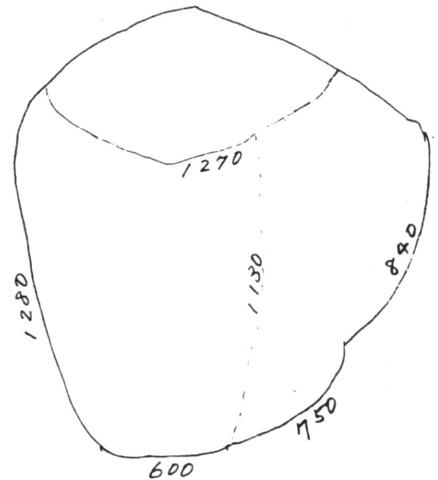
No. 5



No. 5

番号	幅	深さ
1	132	87
2	97	93
3	102	99
4	94	107
5	93	79
6	87	69
7	94	66
8	92	82
9	83	78
10	81	77
11	87	84
12	84	95
13	85	92
14	84	79
15	84	89
16	79	73
17	87	77
18	70	71
19	80	55
20	85	67

No. 6



海底沈石調査

当初、継続事業部会は、「鍋島石」と同じように江戸城増改築用石垣石の運搬途中、小坪沖で船が遭難し沈んだと思われる石の引き上げを計画しました。しかし計画を進めるうちに、予算不足と小坪漁業協同組合の漁業権が絡み、今回は確認調査のみを実施しました。

まず、①ボランティアダイバーと器材の選定。②小坪漁業協同組合に打診と趣旨説明。③情報収集（漁師さんから、それらしきものが沈んでいるとの情報が得られた。しかしそこは漁場であるため、場所は公表しないしてほしいとの要望を受ける。）それ故、今回はその沈石場所を明記する事は差し控えたい。それ以上に、場所まで案内していただいた漁師さんと、快く協力してくれた小坪漁業協同組合の皆様に深く感謝の意を現したい。④実施日を9月20日に決定。

今回小坪漁業協同組合からは平井保徳組合長、高橋兼吉副組合長、ポイント指定の協力者には大竹丸の方々、部会員の佐久間浩氏を始めとするボランティアダイバーグループとして普通はるみさん、池田伸一氏、千葉直宏氏、服部勤氏、畑岡秀一氏、プロカメラマンの豊田直之氏、横須賀海洋研究所職員の長根浩義氏、ダイビング器材を提供（有）キャップマリンエンジニアリング様、城郭石垣刻印研究所の田端寶作先生、歴史研究家伊藤一美先生、市史編纂室より飯島セツ子先生、野尻幹雄先生の皆様にはご支援・ご協力頂いた事に心より感謝申し上げます。

記

1994年9月20日微風晴天

出発前点呼、ダイバー8名を含む総勢16名、平井組合長（船長）持ち船の『織エ門丸』に乗船、8時30分出航、沖合に赤い二段旗に大竹丸と書いてあるマーキングの第一ポイント着。池田氏の潜水時間計算により、まず服部氏の概況調査潜水開始、15分後に合図有り、佐久間氏・普通さん・長根氏続いて潜水、まもなく服部氏交替浮上、〔最長5m・他1～2m岩塊有りとの報〕以後30分単位での交替潜水。船長の水深測定では11尋（15～16m）あり、鮮明な確認は難しいと思われる。その後池田氏が30～50cmの砂中より伊豆石と思われる20～30cm大の岩塊と粘板岩を少々削り取ってきた（共に部会で保管）、豊田氏により調査状況を水中カメラに収めた。

10時25分第二ポイントに移動、10分後到着潜水開始、11時3分、畑岡氏より〔人口

の加工跡らしきものを多数発見の報、(その後7個確認出来た)、一同歓声をあげた。特に自分自身の目で現物を確認できたと、普道さんは興奮を全身で表わしていた。(実行した甲斐があったとの思いを込めて) ほぼ全員のダイバーで探査開始〔11時20分、大きさ1.5mの岩塊に10cm弱、幅5~6段クサビ跡及び約30cm方形の中、対角線に \otimes 印の刻印を発見、更に丸に十字のもあるとの報。最初の発見者畑岡氏が花崗岩のかげら(部会で保管)を削り取ってくる〕。此処の水深は、船長の測定で約3尋(4~5m)あり、船上からも海底にひとで、海草等が散見出来た。服部氏持参のエアークンプレッサー使用の潜水具を着用し、建設用接着剤(エスダイン・ジョイナーW冬用)2種類を混ぜ合わせ刻印の型取り作業開始、固まるまで30分~1時間要するとのこと。11時45分池田氏より〔4m/5m/6m長の岩塊ありとの報〕。これを機に午前中の作業を12時15分で終了、小坪港に帰着。昼食の雑談で田端先生より〔丸に \otimes 印は加賀城石垣の刻印にあるので、今回発見された石は加賀藩のものではないか?〕との見解であった。

午後はダイバー8名を含む15名で13時に出航、第二ポイント着、13時15分潜水開始。13時20分刻印型取り4個引き上げるがまだ完全に固まっていない。受け渡しの時、受け損ない一枚が海底に沈みかけるハプニングもあった。4枚のうち3枚は能楽で使う鼓の形で、残り一枚は十字型(キリシタンマーク?)で各部分の計測を行った(別図参照)。型取りできなかったなかに、子供が描く屋根付きの家型のもあるとの話(ビデオにより確認)。沈石は第二ポイントを中心に江ノ島方向へ5m、大崎方向へ4m、東へ6m、南へ5mの範囲に46個もあり、最大1.5mで第一ポイントと異なり積み重なっているのも一部あり、殆どがまとまっている(浅海での転覆の為か)。14時20分第二ポイントマーク引き揚げ、次に第一ポイントのマーク引き揚げ、14時35分小坪港帰着。

帰着後、平井組合長のご好意により、小坪漁業協同組合二階にて本日の成果について話し合った。

ダイバーの方にご意見を伺ったところ、服部氏・池田氏共に潜水業務が無事終了したことが第一の成果であるとのこと、私どもも同感である。豊田氏の撮影したビデオを映写(液晶のためか全体が緑色に写っていた)。刻印探しを目的としなければ、それとは気が付かないほど附着物に覆われている状態で、ダイバーの方には良く見極めてくださったとの感謝の念でいっぱいである。最後に一同話し合いの結果、「江戸城築城または修復の為、徳川幕府が諸大名に下命した石垣石に間違いなし。今回発見された沈石は慶長年間頃の物である」との見解で話し合いを締め括った。尚、豊田氏にダビングを依頼、漁業組合と本部会の記録とする予定。又今後、沈石調査(スポンサーをみつけて?)が継続し行われるときに、有効に活用できる事を念じて小坪沖沈石調査事業の報告と致します。

以上

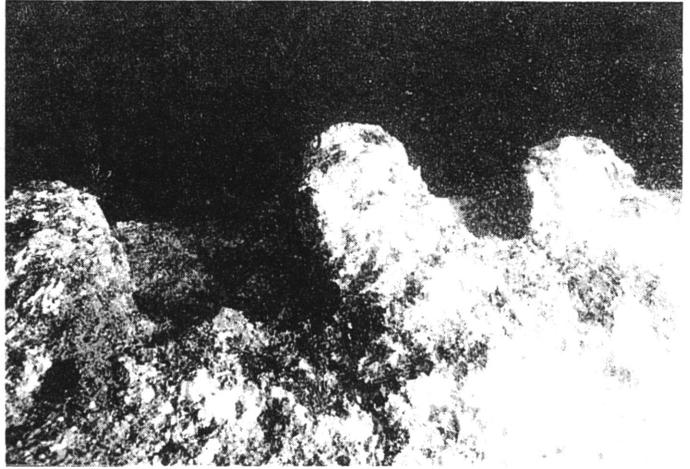
追記：後日田端先生より再検証の結果「特徴は全体の図形が大きいこと、普通刻印のサイズは100cm、大きいので150cm位であるが、今回発見された刻印はそのサイズが約1.5～2倍以上有る。また、自分が昭和47年1月2日調査した下田賀の資料からも、逗子で発見されたものとほぼ同じ刻印が4か所見つかっている。今回発見された刻印は加賀藩のもの」との報をいただいた。

沈石調査参加者

田中 俊樹 (実行委員会委員長)	田端 寶作 (城郭石垣刻印研究所)
斎藤恵一郎 (〃 記念事業室長)	晋道はるみ (ボランティアダイバー)
田口 聰 (〃 継続事業部会)	池田 伸一 (〃)
田中 肇 (〃 〃)	千葉 直宏 (〃)
小野 重長 (〃 〃)	服部 勤 (〃)
佐久間 浩 (〃 〃)	畑岡 秀一 (〃)
田中 洋子 (〃 総務部会)	豊田 直之 (〃)
伊藤 一美 (逗子市教育委員会教育研究所長)	長根 浩義 (〃)
飯島セツ子 (〃 市史編纂室)	平井 保徳 (小坪漁業協同組合 組合長)
野尻 幹雄 (〃 〃)	高橋 兼吉 (〃 副組合長)
	大 竹 丸 (〃)



調査が無事に終り笑顔で帰港
「織I門丸」船上にて

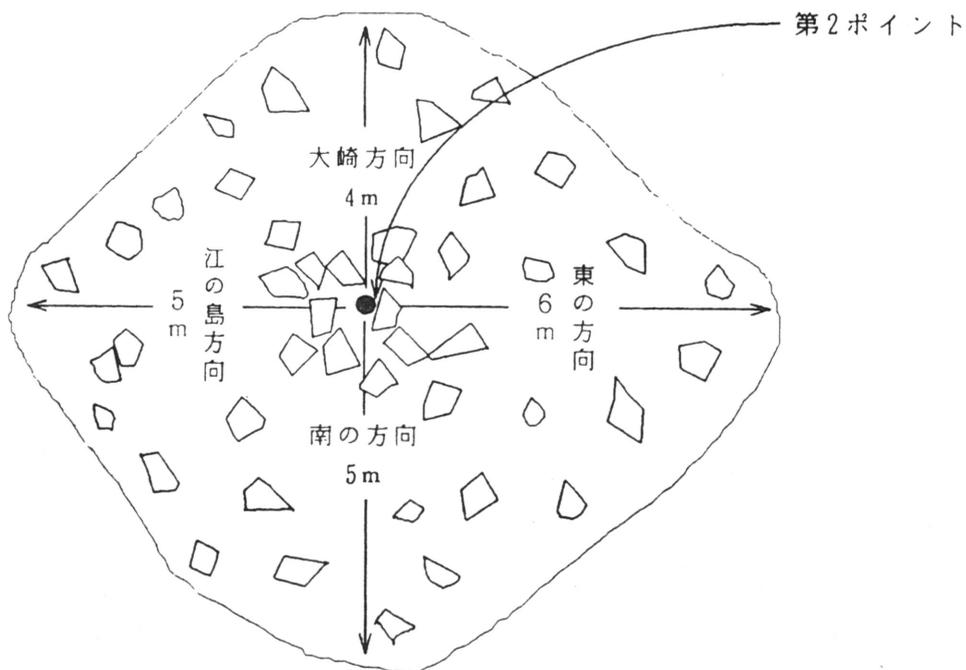
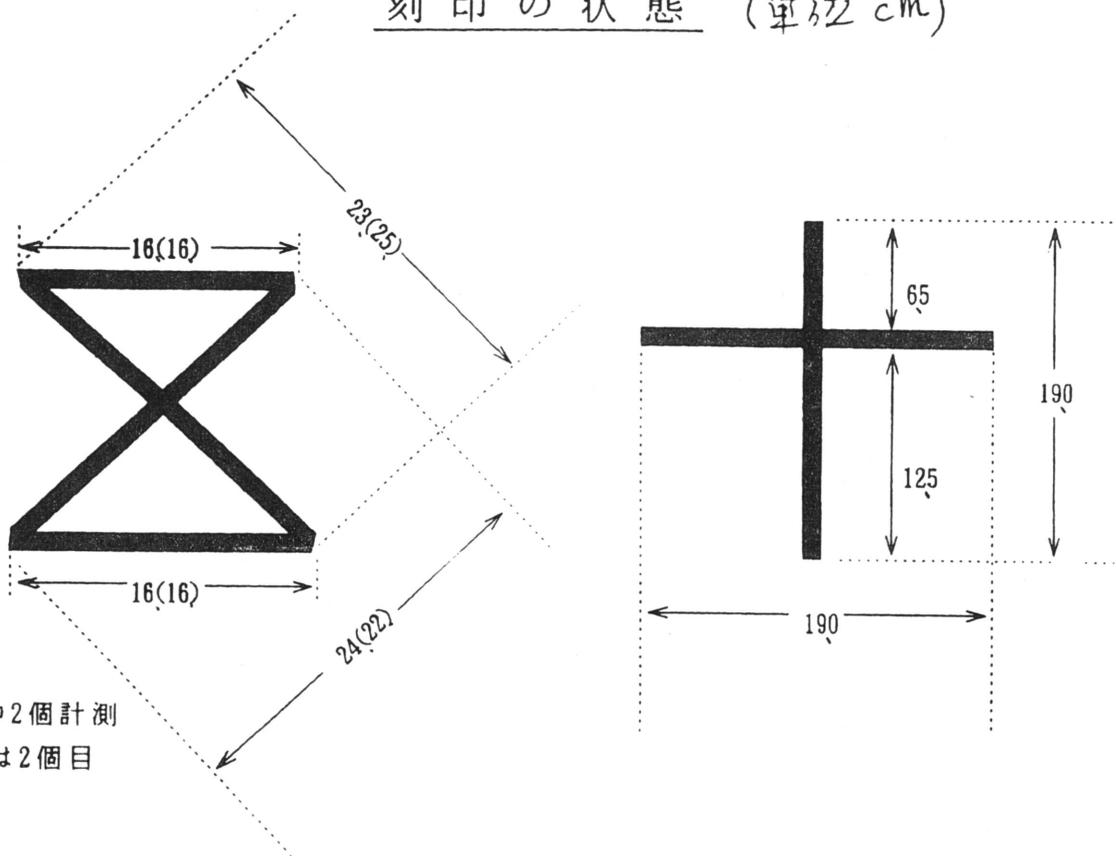


矢穴がくっきり見えている



付着物を取り除いたら現われた刻印

刻印の状態 (単位 cm)



上記第2ポイントを中心に46個の岩塊が散乱している。

参考文献

- 1) 「明治の文学・不如帰」学習研究社
 - 2) 「蘆花全集第五卷」徳富蘆花 新潮社
 - 3・6) 「小説不如帰」岩波書店
 - 4) 「広辞苑第四版」岩波書店
 - 5) 「岩波古語辞典」岩波書店
 - 7) 「改訂逗子町誌」逗子市
 - 8) 「鎌倉辞典」白井永二 東京出版堂
 - 9) 「手帳 第49冊」手帳の会
 - 10) 「逗子の三代史 明治大正昭和年表」手帳の会
 - 11) 「鷺の浦風土記」石井清司
 - 12) 「三浦古尋録」横須賀市
 - 13) 「わたくしたちの小坪風土記」小坪地区青少年健全育成推進会
 - 14) 「随筆藻塩草」藤原楚水
 - 15・18) 「国史大系徳川實記第一編」吉川弘文館
 - 16) 「日本の歴史16 江戸幕府」小学館
 - 17) 「日本史小百科24 城郭」西ヶ谷恭弘 近藤出版社
 - 19) 「江戸城」村井益男 中央新書
 - 20) 「真鶴の文化財」真鶴町教育委員会
 - 21) 「文物の街道」泉秀樹 恒文社
- 日本野鳥の会フィールドガイド「日本の野鳥」高野伸二 写真
山溪カラー名鑑「日本の野鳥」山と溪谷社 写真

執筆担当

P 1～14 田中洋子
P 15～17 小野重長

題字

原きく子

継続事業部会報告書

発行 平成7年3月14日
発行者 市制40周年記念事業実行委員会
問い合わせ先／逗子市役所内 都市政策課
印刷所 株式会社アーテック